

山桜の里 戸赤

次(平成27)年度から 区費2千円値上げ

を取り崩しての決算となりました。赤い羽根、歳末助け合い募金などに相当する額を一世帯年額二千円平成二十七年度から値上げされることとなりました。森林組合連絡員は各集落組頭が兼務。

区長に渡部利男さん、副区長・星盛雄さん、会計・渡部義文さん、生産組合長・星隆雄さんなどほぼ全役員が再選された今年の総会は三月十六日、



山菜券売上表彰者

1位室井正司64枚

2位星光美24枚

3位小椋俊幸20枚

4位小椋一13枚

5位星隆雄12枚

戸赤区26年度総会

出席者の顔ぶれ



【木地の学習No.41】岩瀬郡天栄村湯元地区の記事小屋 東山温泉奥の二弊地から会津布引にかけては、古くから木地師が稼業したところである。湯元地区の木地小屋としては、板小屋、更目木(ざらめき)、湯小屋(現・二岐温泉)が知られていた。更目木、湯小屋には、現在も子孫が居住しているが、板小屋は、天保の飢饉で離散し、廃材となってしまった。跡地には、百数十基もの墓石が残されている。これら3小屋に落ち着く前には、やはり何ヶ所も移動して歩いたことが判明している。館岩村の菊地家系図によると、「蒲生氏郷と共に会津入りした先祖は、慶長十三(1,608)年仁平治山(東山温泉奥の二弊地集落現廃材)へ移り、そこの木地師、内田藤左衛門に婿入りした。その後、藤左衛門は湯本吉ノ目に移り住んだ。先祖は、延宝三(1,675)年下ノ小屋に移り十九年居住し、元禄六(1,693)年湯小屋へ移る」とある。内田氏の祖先については不明であるが、元龜、天正以前より二弊地入山に住んでいたという。会津布引山は会津藩領の境界争いがあり、幕府評定所の裁許によって元禄十二(1,699)年に藩境が確定した。その際、提出された資料の中に、木地小屋の記述が見られる。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)

「ふくしまっ子」などでやや持ち直すが減少傾向つづく



店頭に並んだ凍み大根(物産館)

戸赤自然体験あそびの学校 やまざくら 年度別利用実績 学校・木工工房利用の現状

	会議		宿泊		イベント		見学		その他		計		写真
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	
18	4	49	25	191	4	341	8	196	20	238	61	1,015	520
19	2	37	72	181	2	81	2	47	4	29	82	375	459
20	3	50	37	256	2	163	6	143	2	15	50	519	295
21	2	38	31	142	1	45	2	30	0	0	36	255	290
22	3	65	17	208	0	0	1	11	3	66	24	350	215
23	0	0	16	155	0	0	0	0	0	0	16	155	72
24	1	34	6	38	0	0	0	0	3	82	10	154	142
25	0	0	11	81	0	0	0	0	9	331	20	415	100

戸赤水車式木工工房年度別利用実績

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	計
18													
19	143	385	792	233	262	131	182	244	156	134	102	121	2,885
20	145	332	461	303	282	202	229	318	123	76	91	62	2,624
21	104	390	702	319	201	167	249	647	338	109	53	96	3,375
22	104	285	1,167	1,450	177	166	147	223	93	34	16	27	2,333
23	41	98	498	145	123	54	75	225	143	15	16	6	1,439
24	21	222	650	120	225	59	51	230	183	14	12	17	1,804
25	47	185	307	127	156	155	96	193	87	82	23	20	1,478

郷土の食材
店頭飾る凍み大根
他のものと比べると
ひとときわ肌のきれいな
凍み大根が物産館の陳
列棚にならべられてほ
どなく、年配の二組がそ
れを手になさね、昔(むかし)

南会津地方・首都圏の観光物産展で地場産品PR こねバチ など人気

「純粋な地場産品だからこそ安心してお客様に説明できた。本物の木のぬくもりを求めている人がいる。こねバチ(径約1尺5寸クリ・拭き漆1万5千円)は安い。と喜ばれた。」



子どもが少なくなかなか見られなくなった雛飾り



有楽町と宇都宮で南会津PRのため観光物産展が催された(3月6~7日振興局主催)

これは戸赤の木地品を首都圏の観光物産展で販売してくれた町の観光協会の方の声です。ぐい飲み、菓子バチなど7点が売れた有楽町と宇都宮での「おいでよ!南会津 観光物産展」で改めていいものは売れるとの実感を強くすることができました。

ちでも作ったけれど手間がかかってやらなくなりました。なつかしい味なので煮物にしよう。と手にされし
ジに入っていました。この味を知っている方が買っていたのか、郷土の食材の根深さを感しました。

(ストーリー性のある村づくりのために[No.11]・紅梅前宮 それから以仁王は、案内されて谷沢に行ったが、後ろの山から敵の射た矢が黒丸に当たり、とうとう戦死してしまいました。王も右の膝に負傷を負い、疲れきって、もう立てなくなった。以仁王は、「天命や大村杉の山に消む 口に流るる 以仁の谷」と辞世の歌を詠まれ、31歳の若さで腹を切り遂に墓去されたのである。あわや王の首を奪おうと、敵勢七、八人が寄ってきたが是丹坊(ぜいたんぼう)というお坊は急いで御首を切った。間髪を入れず是丹の家来金川四郎走り寄って、以仁王の御首を抱いて消え去った。渡部丁七は、腹十文字にかき切って王の後を追った。金川四郎は王の御首を捧げて、越後と会津の国境所得峠にさしかかるや、急に白髪のお翁が現れ、「われは三田八幡である。以仁王の御首を渡せ。渡さぬとあらば通すことならぬ」と、大声で叫ぶ。四郎が驚く間もあらず、首を取り上げてしまった。八幡は首を持ち、お経を誦しながらしばらく行った途中で川原石を積み上げ、黒丸や渡部丁七も傍らに葬り、王の短刀も安置し懇ろに礼拝して御所の宮と呼ぶことになった。このことを伝え聞いた源三位頼政らは切腹して果てたが、王の御子の四の宮は生き延び、やがて仇を討つことになるのである。高倉神社は大内村に鎮座、以仁王一統が巖かに祀り継がれている。